ISSN-1880-4799 信州短期大学紀要, 第 18 巻, 53-57(2007.2)

教育事例

介護福祉学生による身体障害者福祉サービスの現地調査とその教育効果

－ 佐久平駅周辺の店舗での事例 －

根本 秀美(信州短期大学)

Educational effects of fieldwork on welfare services for the physically disabled by students in the department of care and welfare

: A case study in stores near Sakudaira Station

Hidemi Nemoto (Shinshu Junior College)

Abstract: Students in the department of care and welfare of Shinshu Junior College performed fieldwork on the welfare service status for the physically disabled in 105 stores in the neighboring area of Sakudaira Station, and reported and exhibited the results in the college festival. We discuss the educational effects of the series of activities. A questionnaire was performed after the college festival in 21 students in Class A who performed the fieldwork. More than 80% of the students replied that they had learned. In particular, good positive answers were obtained in terms of motivation, learning, and self-evaluation from 11 students who participated in the fieldwork, showing educational effects. The purpose of early education by fieldwork for general students is considered to be the learning of communication and research skills. The present activity incorporated these effects, though not adequately. However, we regret as instructors that we could not instruct students so that they could concretely evaluate the association between the results of the fieldwork and care.

Key words: fieldwork, students in the department of care and welfare, welfare service for the physically disabled, educational effects

Ⅰ はじめに

本大学のライフマネジメント学科介護福祉専攻のAクラスは、身体障害者の方からの要望もあり、佐久平駅周辺地域の 105 店舗の身体障害者のための設備やサービス状況の現地調査を行った。この活動の目標は以下の通りである。まず佐久平駅周辺店舗の身体障害者福祉サービスマップを更新することである。第 2 は調査をすることで、佐久平駅周辺地域の店舗の福祉サービス状況を知り、さらに身体障害者が生活をする上での困難等を学ぶことである。現地調査は夏休み中に行い、その結果を学園祭で展示発表した。

今後はこの調査結果をもとに身体障害者の方が利用できるパンフレットを作る予定である。

本稿の目的は活動目標が達成したかを検討することと、この活動の教育効果を考察することである。

Ⅱ 対象と方法

対象は信州短期大学ライフマネジメント学科介護福祉専攻の第一期生の 1 年次生Aクラス 21 名(男 11 名 女 10 名)である。方法は学園祭展示発表後の 10 月 31 日のクラス会でアンケート調査を依頼した。アンケートの概要は、現地調査の参加の有無、関連する法律の学習の有無、佐久地域の公共サービスの調査の有無、学園祭に向けて作業の参加有無、活動の参加動機、調査結果について、活動を通しての学び、活動を通しての自己評価と活動を行ってのクラスと友人関係の変化についてである。

アンケートの調査期間は、平成 18 年 10 月 31 日～11 月 8 日の9日であった。

倫理的配慮として、アンケートは自由意志でよいこと、プライバシーを守ること、目的以外には使用しないことを説明し承諾を得た。

Ⅲ 活動の経緯と経過

1. 佐久平駅周辺店舗の身体障害者福祉サービスマップの更新を企画した動機

学生は社会福祉概論の授業で佐久地域の障害者の方が、地域の店舗や市街地の身体障害者のための設備やサービスの状況の分かるパンフレットの更新を強く望んでいること

を知った。5 年前に身体障害者の方が自らの努力で作成し活用しているが、近年の佐久平地域の発展に伴い現状にそぐわないものになってしまった。更新するための調査が必要であるが、労力的に困難である。店などの設備やサービス実態が不明なので生活に必要な雑貨の購入や娯楽等気楽に外出や入店できないために困っていること知った。

その実態を聞いて 1 人の学生がなんとか役に立ちたいと思い、クラス会で店舗の現地調査と身体障害者福祉サービスマップの更新を提案した。全員の賛成が得られ、その結果を学園祭で発表することになった。

2. 活動の経過

1) 現地調査の準備

平成 18 年 7 月 13 日のクラス会(出席者 39 名欠席者2名)で身体障害者福祉サービスマップの更新を行うことを決めた。

調査の準備として、学生4名と5年前に身体障害者福祉サービスマップを作成した身体障害者のNさんとのミーティングを行い、調査項目や要望を聞いた。次に調査依頼書を作成し調査範囲を佐久平駅周辺 1 km～1.5 km四方と決め、対象を、日常に使用している店舗で大型店舗、中小店舗、スーパーマーケット、生鮮食料品店、日用雑貨店、衣料品店、薬局、飲食店・喫茶店、理容・美容院、コンビニエンスストアなどと決めた。調査項目はNさん意見を参考にハード面は 8 項目とソフト面は 5 項目の合計 13 項目である。
そして現地調査をする日程を決め参加者を募った。

2) 現地調査

調査期間は平成 18 年 8 月 21 日～9 月 18 日の主に夏休み中の 15 日間で、参加者は 11 名で一人平均 8 日であった。調査店舗数は 105 件で調査に協力が得られなかった店舗は 10 件であった。調査の手順は、大型店舗は事前に電話をして趣旨を説明した上で都合のよい日に店舗に赴き依頼文を責任者に手渡した。日程が合わない時は依頼文を郵送した。実際の調査は、調査の承諾と調査日の連絡を受けてから、指定された日に来店し、責任者に聞きその後店内を回り点検した。中小規模の店舗は、直接来店し趣旨説明を行ない承諾を得た後、調査用紙を手渡した。後日または指定された日に再度来店し調査用紙を回収した。

調査は常に 2 人 1 組で行い、活動費用は、すべて自己負担とした。

3) 学校での調査と学園祭準備

現地調査のほかに学内でも身体障害者に関するサービスの法律「高齢者、身体障害者等が円滑に利用でき特定建築物の建築の促進に関する法律(ハートビル法)などを調べた。また佐久地域の公共施設の身体障害者福祉サービスも調べ学園祭の発表の資料とした。

学園祭発表準備として 現地調査結果と考察等の発表の原稿作り、展示用の店舗の地図を模造紙で作成した。学園祭(平成 18 年 10 月 21 日、22 日)の展示会場には見学者に説明するために常時 2 名を置き対応した。学園祭終了後の 10 月 31 日にクラス会を行いまだ調査結果や発表内容を見ていない学生のために、担当した学生が再度学園祭で発表した内容を説明した。

Ⅳ 結果

アンケートの回収率は 100%であった。

1. 学生の活動の参加について

現地調査と学内での身体障害者に関するサービスの法律等の調査と学園祭発表準備までの活動に参加した学生が 19 名で、参加しなかった学生は 2 名である。現地調査に行った学生は 11 名(男 9 名 女 2 名)、現地調査に行かず関連の法律や佐久地域の公共施設のサービスの実態を調査したものが 8 名であった。発表準備をしたものは 17 名であった。現地調査と法律等の調査と発表準備の全過程を行った学生は 7 名であった。活動状況は表 1 である。

表1 活動状況

現地調査	参加者 (n=11)	不参加者 (n=8)	未活動 (n=2)	計 (n=21)
法律を調べた	6	2	0	8
サービスを調べた	5	2	0	7
発表の準備をした	10	8	0	18
計	21	12	0	33

2.活動参加の動機

複数回答で図 1 である。役立つことが出来るが 11 名、勉強になるが 11 名でそのうちいずれも現地調査者は 9 名である。決まったことなのでは 9 名で、その内の 7 名は現地調査不参加者である。

3.調査結果について

佐久平駅周辺の店舗の障害者へのサービスについて、充実していないと答えた学生は 19 名、普通は 2 名であった。充実しているは 0 であった。

4. 活動を通して学んだこと

複数回答で図 2 である。店舗のサービス実態が分かったのは 13 名、店舗の人の障害者のサービスの考え方が分かった 7 名、でその内現地調査参加者は 6 名であり、障害者の方の大変さが分かったについては 10 名でその内現地調査者は 8 名である。分からないは 3 名である。

5.自己評価について

1)この活動の経験についての評価は図3である。良い経験だったと答えた学生は13名でクラスの6割以上である。その内現地調査に行った学生は10名であった。どちらともいえないと答えた学生は7名でその内6名は現地調査不参加者であった。

2)この活動が今後に役立つかについては図4である。役立つと答えた学生は16名でクラスの7割以上である。その中で現地調査参加の学生は11名全員である。分からないは4名、思わない1名でいずれも現地調査不参加者である。

3)この活動に興味が持てたかについては、図5である。興味がもてたと答えた学生は12名でクラスのほぼ6割でその内9名は現地調査参加者であった。どちらともいえないと答えた学生8名のうち6名は現地調査不参加者であった。

6.クラスと友人関係の変化について

1)この活動をしたことでクラス全体のまとまりについては変わらないと答えた学生は11名、良くなったは5名、悪くなったは2名であった(図6)。

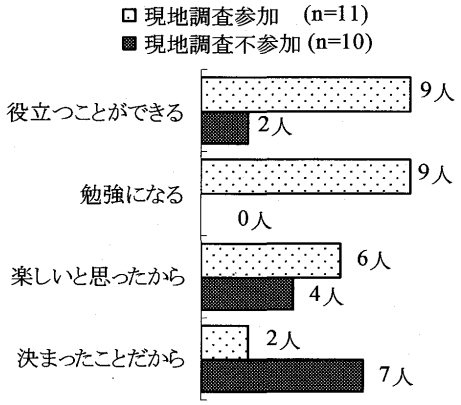

図1 活動の参加動機

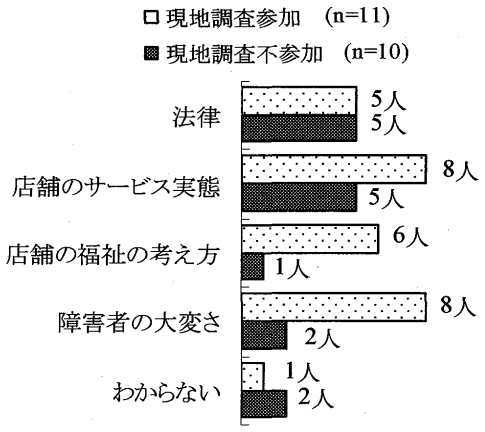

図2 活動を通して学んだこと

2)クラスの友人との関係について、変わらないと答えた学生は14名、良くなったは6名、悪くなったは1名であった(図7)。

Ⅵ 考察

1. 活動目標について

活動の目標は「調査をすることで佐久平駅周辺地域の店舗の福祉サービス状況を知るとともに、身体障害者が生活をする上での困難等を学ぶ」であり、その点について考察する。

アンケートの結果から、活動の学びがあったかについて、分からないと答えた学生3名を除いた18名は何らかの学びがあったと考えてよい。

店舗の身体障害者福祉サービスの実態を6割以上の学

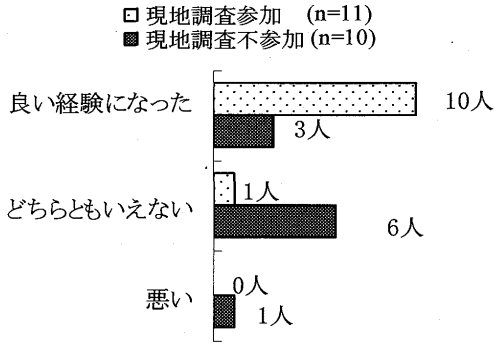

図3 自己評価 活動の経験

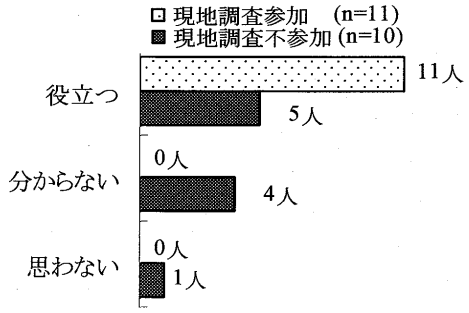

図4 自己評価 今後に役立つか

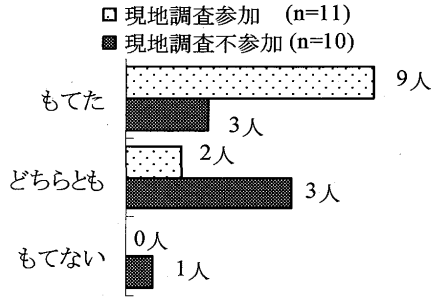

図5 自己評価 興味がもてたか

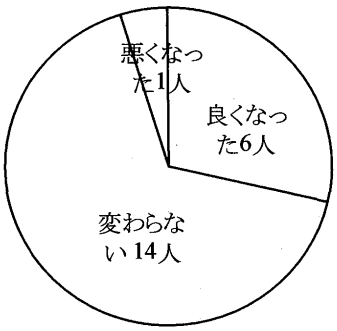

図6 クラスのまとまり

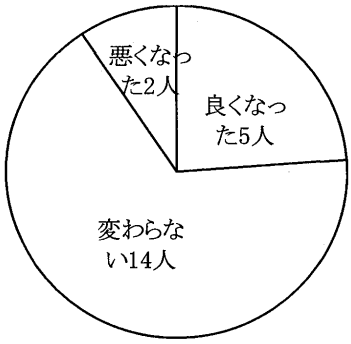

図7 クラスメートとの人間関係

生が分かったと答えており、現地調査不参加者においても、調査結果をみて理解できたともの考える。店舗の方の身体障害者へのサービスの考え方についてと、障害者の生活上の困難さについて理解できたは、そのほとんどが現地調査を行った学生である。アンケートの記述に実際の現地調査で、商店街の方、店長や店員の考えや配慮の一部がわかった、障害者の方は障害者用トイレがある店か事前に調べてから外出を計画しているなど調査を行っている中で聞いた、新しくできた建物でもハートビル法ができたとはいえ段差がありスロープなどの障害者の方への対策が遅れている、また視覚障害者の方への配慮はほとんど施工されていないと思ったなどの実態をみて、生活上の困難さについては想像できたのであろう。

学んだ内容の詳細については、このアンケートでは限界があるが、目標については8割以上の学生は目標に近づけたと考える。特に現地調査参加の学生の学びは多く内容も深いと思われる。

2. 現地調査の教育的効果

この活動で現地調査参加者 11 名と未参加者 10 名を比較してみると動機、学んだこと、自己評価に顕著に違いが見られる。

動機については、現地調査参加者は身体障害者の方に役に立ちたい、活動することは勉強になると積極的な回答が 8 割以上を占めていた。現地調査不参加の 7 割は決まったことだからと義務として行っていたと思われる。

西城戸は社会調査実習に限ったことではないが、モチベーションを高めるためには、学生が関心をもち、有意義であると感じるテーマの設定が必要と言っている。また時間的なコストも学生のモチベーションに大きく影響すると言っている[1]。実際に、現地調査は学生が主体で行い費用はすべて自己負担であり、時間も惜しまずに活動した。このことは、調査することの意義をしっかり認識していたことと考えてよい。現地調査参加の 11 名のうちの主たるメンバーは、調査に入る事前に、障害者のNさんからの生活上の困難さ等の具体的な話を聞き、その内容から強く動機づけられたとも考えられる。

最近、現地調査は単なる聞きとりや現地視察等にもフィールドワークといわれている[2]。また学問的な目的だけでなく現代の社会問題の対処のため調査で学者でない多くの人が多種の目的のために行っている[3]。今回の学生の調査もこの範疇であるかもしれない。原尻は大学での現地調査(フィールドワーク)教育は専門家養成の意味と基礎教育(初期導入教育)としての意味があるといっている。基礎教育の目的は、人との関わり方、自己理解と他者理解のなかでコミュニケーション能力を養い現場の声を聞く大切さを学ぶことであると言っている[4]。介護福祉専攻においては、当然のことながらその学科はない。しかし介護においてはコミュニケーション能力を身に着けることは第 1 の優先課題で重要である。アンケートの中に、当初は話しかけることに勇気が必要だった。おどおどしてしまった。などの感想があり、努力してコミュニケーションをとり、調査をしたことが伺える。

次に研究課程を学ぶことも大きな現地調査の教育目的である。問題意識をもち資料を調べ現地に出て調査をする。その結果をまとめる。今回は文献や資料の検討は軽いものであったが、目的もはっきりしており、調査方法を検討し、実施し結果をもとに考察し発表したことは研究過程を学んだものと考えてよい。この一連の経験は大きな学びとなった。アンケートの自己評価にも現れているように、よい経験であり今後に役立つと 6～7 割以上が回答している。ほとんどこの活動に参加しなかった学生からも、研究や発表について、どんな風に行えばよいか、これをみてわかったとの意見もあった。アンケートの自由記載から、見学者からの意見で期待している等の励ましもあったが、 グラフに数字を入れないと分からない、このテーマの表現では分かりにくいなど指摘があり、発表するには他人に分かるような表現方法をとなれば伝わらないことも学んでいる。この経験が今後につながると考える。

3. クラスの変化

この活動はクラス全員の合意のもとに始まった。筆者は学生がお互いに尊重し合い皆で力を合わせて 1 つの課題をやり遂げることで、人間的な成長やクラスの雰囲気、またお互いの友人関係がより良くなることを期待した。しかしアンケート結果からわかるように、ほとんど変化が見られない。ほとんど活動に参加しなかった学生からは変化がないという回答であったが、現地調査と発表のための作業をした中に、クラスと友人の関係が良くなったという学生と若干悪くなったという学生に分けられた。やはり活動の中で、一生懸命行う学生と、行なわない学生の温度差を敏感に感じての結果であると考える。このことからも教師は、クラスの活動を行うにあたり、学生の一人一人の観察やきめ細かな配慮をしていかないと、クラスの雰囲気が悪化したり、学生の人間関係の破綻につながっていくことに細心の注意を払う必要がある。

4. 教師としての役割と反省点

今回の活動は、学生主体であるため、筆者はサポートの役割に徹した。特に学生が現地調査を行っている時は学校に控えており、店舗の方からの問い合わせの対応や学生との連絡に当たった。また猛暑の中での活動であるため病気やアクシデントに備え学生が不安なく活動できるよう配慮をした。

しかし教師の反省点としては、一連の活動と資料や調査結果から、現在学んでいる介護とどのようなかかわりがあるのかなど具体的に考えさせる指導ができなかった。また発表においても、資料のまとめや考察に充分な時間がとれず、学生間での充分な議論ができないままの発表になってしまった。調査から発表までの一連の活動で何を学ばせたいのか、その事象(調査結果)の解釈を皆で考え討論することに重きを置くのか、研究過程を学ばせたいのか、また現地調査の経験なのか、明確な指針がなかったことが反省点である。

まとめ

本稿の限界として、担任教師によるアンケート調査は、学生にとっては半強制的に受け取る可能性があり、回答もバイヤスがかかる可能性があると考える。しかし現地調査の体験は貴重で、学びは多かったと確信する。

今後、この調査結果を障害者が利用できるパンフレットの作成の作業を行う予定である。

(投稿 2006 年 12 月 5 日、受理 2007 年 1 月 11 日)

注

(1) 西城戸誠:“社会調査教育の現状と課題,”京都教育大学,・社会調査実習の実践を事例として,教育実践研究紀要,(5)23-23(2005).

(2) 原尻英機:“フィールドワーク教育の実践とその教育的効果:コミュニケーション能力育成を中心にして,”静岡大学人文学部人文論集,56(1)73-73(2005).

(3) 杉本孝:“京大式フィールドワーク入門,”NTT出版株式会社, 6,5-6(2006).

(4)原尻英機: 前掲 P75

参考文献

(1) 高齢者:“身体障害者等が円滑に利用できる特定建築物の建築の促進に関する法律(ハートビル法),”http://up.t.u-tokyo.ac.jp/law/hart/hbhouindex.html,1994/6/29

(2) 佐藤郁哉 : “フィールドワーク一書をもって街へ出かけようー,”新曜社,23-27(1998).